



Title	古墳時代棺槨の系譜と展開
Author(s)	岡林, 孝作
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69739
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (岡林 孝作)

論文題名 古墳時代棺槨の系譜と展開

論文内容の要旨

古墳時代社会は、古墳の築造およびその築造行為自体を含む古墳被葬者の大がかりな葬送儀礼の挙行を通じて、さまざまなレベルでの集団内部および集団相互間の秩序や連帯を確認する社会システムを有していたと想定される。本論では、多様な古墳の構成要素の中でも、墓としての古墳の核心部分であり、古墳における葬送儀礼においてもっとも重要な役割を果たしたと考えられる棺槨を取り上げる。

ここでいう棺槨とは、被葬者の遺体を直接収容する棺と、その棺を埋置するために墳丘内に構築される古墳の堅穴系埋葬施設を一体的に呼称するものである。なかでも、前期古墳における長大な刳拔式木棺と堅穴式石室の組み合わせを古墳的な棺槨の完成形と評価する。その系譜と完成、その後の展開と変容のメカニズムは、古墳の葬送儀礼において棺槨が果たした儀礼的、宗教的機能と不可分の関係を有すると考えられる。

以上の認識に立ち、古墳時代棺槨の系譜と展開を、中国を中心とした東アジア世界における墓制の動向にも目配りしながら整理し、その歴史的な流れをあとづけるとともに、古墳時代社会において棺槨ひいては古墳が果たした役割をさらに明確化することが本論の目的である。この目的のために、①古墳時代木棺の体系的整理、②木槨・堅穴式石室の系譜・成立過程と変遷過程の整理、③東アジア世界における棺槨の動向と中国的な棺槨の思想的背景、の大きく三つのテーマに沿って多角的な視点から古墳時代棺槨の検討をおこなった。

①：上記の検討のためには、古墳時代木棺の実態を体系的に整理することが不可欠である。とくに長大な木棺の存在は古墳時代棺槨のもっとも大きな特徴であり、古墳の儀礼的、宗教的機能を考察するうえでも、その系譜や機能、時期的変遷の解明が課題となる。しかしながら、腐りやすいという木材の特性から実物資料はきわめて少なく、これまでの遺構論を中心とした研究ではその実態解明に限界があった。

そこで、第1～5章では遺物論的な視点を取り入れた各種の研究法を提唱し、実践した。棺の構造や形態の全体像がほぼ判明する程度に材が大きく遺存している出土木棺資料の資料化に努めるとともに、木製品としての木棺の重要な属性である用材選択について樹種同定結果を集成し、これらを材料として木棺の製作技術と形態の特徴、用材選択の時期的、地域的傾向などを体系的に整理した。また、棺内の利用法と内部構造の検討を踏まえ、その長さが求められた木棺の機能について時期的変化も含めて検討を加えた。さらに、古墳時代中期以降の釘・鏝といった金属製の接合金具の使用についても総合的な検討をおこなった。

畿内を中心とした地域における前期古墳の長大な木棺の特徴としては、刳拔式構造、コウヤマキ材の使用、長大な棺の中央に遺体を安置する中央型の棺内空間利用とそれに対応した棺内空間の分割構造などを指摘できた。またその思想的な背景に、中国的な遺体保護の理念があり、その実現のために防水性・密閉性・堅牢性が重視されたことを明らかにした。

②：木槨は中国地方における一部の弥生墳丘墓で認識されていたが、調査研究の進展の結果、庄内式期の畿内を中心とした地域の前方後円墳における採用の実態が知られるようになった。これらの木槨は長大な刳拔式木棺を内蔵し、大型化とともに、一部に石槨をとまうなど石材の多用化が顕著である。また、最初期の方後円墳では堅穴式石室は未確認であり、初期の堅穴式石室には構造的な発展段階の異なるものが存在することから、堅穴式石室の成立過程にも一定の段階があったことが予想される。

そこで第6・7章では、木槨・堅穴式石室・長大な刳拔式木棺といったキーワードを有機的に関連づけながら、弥生時代から古墳時代前期初葉にかけての木槨の成立と発展、古墳時代前期前葉における堅穴式石室の成立とその後の展開を整理した。まず、弥生時代から古墳時代初頭までの木槨および木槨状施設について、木棺構造に対応した床構造の変化、槨構築と棺搬入のタイミングなどに着目した分類、変遷過程を示した。その結果、弥生時代後期後半の中国地方の弥生墳丘墓における木槨の出現を日本における本格的な棺槨の出現として位置づけた。その淵源は中国起源の埋葬制度である木棺と木槨からなる棺槨に求められる。また、弥生墳丘墓の木槨の発展的展開の結果として、奈良盆

地東南部を中心とした畿内地域の勢力が重要な役割を果たすなかで、古墳時代前期初葉の出現期の前方後円墳と結びつきながら長大な刳抜式木棺を内蔵する石槨化志向の大型木槨が成立することを明らかにした。

堅穴式石室の祖形については、弥生墳丘墓における最上位の埋葬形態であった木槨に求め、より直接的には庄内式期の最上位の埋葬形態であった石槨化志向の大型木槨を基盤として創出されたものと評価した。また、複雑な構造をもつ堅穴式石室の諸要素が、当初から完成形として出現したわけではなく、その完成に向けた諸段階があることをトレースした。棺槨の出現から堅穴式石室の構造的完成までのプロセスの背景には、中国的な遺体保護の基本理念にもとづく、防水性・密閉性・堅牢性を重視した棺槨の設計思想が通底しており、粘土槨の出現や石棺の採用といったその後の展開も、この基本理念を背景として説明しえた。

③：秦漢帝国の成立を大きな契機とした中国から周辺地域へのさまざまなインパクトは、東アジア世界の歴史展開に多大の影響を与えた。墓制の面では、中国起源の墓制である木槨墓が、漢王朝の周辺にいた諸民族に点々と受容される動きがみられる。木槨墓を受容することは、間接的にせよ中国的な死生観やそれを反映した葬送儀礼のあり方に触れることでもある。古代中国の葬送儀礼においては、諸場面における殮具（葬具）としての木棺の重要度がきわめて高い。第8章では、中国から周辺諸地域への木槨墓の波及という現象を見据えつつ、漢代木槨墓の展開を地域性の観点から整理するとともに、漢・魏晋から南北朝期にかけての木棺の展開過程についても概観した。そのうえで、棺槨のありように凝縮された中国的な死生観について考察した。

以上、①～③の検討を踏まえ、古墳時代棺槨の系譜と展開の歴史的な流れを以下のように整理した。

弥生時代後期後半～古墳時代前期後葉の最上位の埋葬形態は、組合式木棺＋木槨→長大な刳抜式木棺＋大型木槨→長大な刳抜式木棺＋堅穴式石室の順に変遷した。前者は中国地方の弥生墳丘墓における中心的埋葬施設、後二者は畿内を中心とした地域の前方後円墳の埋葬施設に採用された。古墳時代棺槨の成立過程には二つの画期がある。第一は古墳時代前期初葉における長大な刳抜式木棺の出現と、それと大型木槨の組み合わせからなる初期的な古墳時代棺槨の成立であり、第二は前期前葉における堅穴式石室の出現による完成された古墳時代棺槨の成立である。

第一の画期は纏向諸古墳を中心とする最初期の前方後円墳の出現とその造営の広がり、第二の画期は巨大前方後円墳の出現を含むいわゆる定型的な前方後円墳の成立とその造営のさらなる広がりという考古学的事象と連動している。この二つの事象は、古墳時代的な社会システムが汎日本的に拡大し、確立していく大きな社会変動のプロセスにほかならない。一連の社会変動を主導したのは一貫して奈良盆地東南部勢力を頂点とする畿内を中心とした地域の勢力であり、古墳時代棺槨の成立と展開の動きもまたその枠組みのなかでとらえられる。

また二つの画期ともに、中国的な遺体保護の基本理念のさらなる追求と、新たな技術的背景を基盤とした棺槨の設計思想の刷新によるものである。第一の画期では、朝鮮半島南部からの新たな技術要素が木槨の大型化の実現に一定の役割を果たしており、その背景に2世紀末の公孫氏政権の成立を契機とした地域間交流の活発化があったとみられる。第二の画期は、木槨墓から磚室墓への転換という東アジア的な動向と連動し、槨の構築材を木材から石材に転換することで実現したものであり、3世紀中葉に始まる魏王朝との政治的交渉を契機とする中国文化の新たな流入がその変化をうながす背景となった蓋然性が高い。

前期末葉になると長大な木棺の機能における遺体保護の観念の相対的な希薄化、堅穴式石室の衰退と粘土槨の盛行、最上位の埋葬形態としての長持形石棺の成立と長大な刳抜式木棺の相対的地位の低下といった大きな変化が生じ、中国的なイデオロギーを背景とした前期的な棺槨のあり方が急速に崩壊に向かう。巨大前方後円墳の造営地の移動に端的に示されるように、前期末葉における棺槨の変容は、畿内地域の勢力内部における中枢勢力の交替を要因としたものであった可能性が高い。同時に、3世紀末に始まる中国王朝の混乱がもたらした東アジア世界における中国の政治的・文化的な求心力の低下という背景があったことも考慮される。

社会的な意味での古墳時代棺槨の役割として、まず連帯・秩序の表示としての機能がある。前期後葉までには、東北南部～九州の有力古墳において、長大な割竹形木棺が棺内空間の利用方法も含めた儀礼的、宗教的色彩の濃い規範をとめないながら定式的に共有された。その分布範囲はまさに前期前方後円墳の広がりと同なり、前方後円墳の造営によってその連帯、秩序が表現される広域の政治的結合において、長大な割竹形木棺がとくに儀礼的、宗教的側面で重要な役割を果たしたことがうかがわれる。その内部における畿内地域の中心性は、堅穴式石室、コウヤマキ製木棺の使用といった棺槨のさまざまな要素によって表現されている。いま一つの重要な役割は、中国的イデオロギーの表現としての機能である。銅鏡の多量副葬や水銀朱の大量使用といったあり方も含め、古墳の各種事象に中国志向が際立つ古墳時代前期の状況は、中国王朝との深い関わりのなかで初期国家の形成・発展が進められた当時の社会において、中国的な葬送イデオロギーを古墳に表現することがつよく要請された結果であるともいえる。そのもっとも凝縮された表現が「古墳的」棺槨であり、それと不可分に結びついた古墳被葬者の葬送儀礼であったと考えたい。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (岡 林 孝 作)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 福永 伸哉
	副 査 大阪大学 教授 高橋 照彦
	副 査 大阪大学 教授 荒川 正晴
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：古墳時代棺槨の系譜と展開

学位申請者 岡林 孝作

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	福永 伸哉
副査	大阪大学教授	高橋 照彦
副査	大阪大学教授	荒川 正晴

【論文内容の要旨】

西暦 3 世紀半ばから 7 世紀の 350 年間にわたる古墳時代は、古墳の築造及びそこで挙行される葬送儀礼を通じて、集団内部及び集団間の政治的、社会的秩序が表示される時代であった。本論文は、その古墳において最も重要な、被葬者の遺骸を収容する「棺槨」を取り上げ、多様な構造を詳細に整理・分析するとともに、東アジアの墓制の動向にも目配りをしながら、古墳時代の棺槨の系譜と展開を考察したものである。なお、ここでいう棺槨とは、被葬者の遺骸を直接収容する棺と、その棺を埋置するために墳丘内に構築される埋葬施設を一体的に呼称するものである。論文は 8 章からなる本論に序章と終章を加えた構成で、分量は 400 字詰原稿用紙換算で約 1200 枚、図表 134 点である。

本論文の目的と用語の整理を示した序章に続いて、第 1 章から第 7 章においては、数少ない実物遺存例や土層観察などの発掘調査情報を駆使しながら、棺の全体構造、用材選択、細部構造と機能の関係、緊結金具を用いる棺の実態、外郭施設となる槨の構造など、多岐にわたる諸属性について分析と考察を行った。

第 1 章では、全体像が判明する程度に材が遺存した出土木棺の情報を集成して厳密な資料的吟味を行い、木棺を刳抜式、組合式、釘付式の 3 者に大別するとともに、さらに細部構造の違いにより合計 8 類型を設定し、それらの成立と変遷の過程を詳細に論じた。

第 2 章では、木棺の棺材樹種の情報を全国的に集成し、近畿ではコウヤマキ、東日本にはスギやヒノキが主流を占めるといった地域性を明瞭にした上で、コウヤマキ地域圏では他樹種の棺が下位階層の棺に用いられる傾向があるといった用材の階層性の存在を指摘した。

第 3 章では、有力古墳に用いられる長大な木棺の小口部分の構造や仕切り板による空間分割の状況を検討した。そして、古墳前期には遺体を物理的にも観念的にも密封する意図が強く働いていたと理解し、そこに葬送観念における中国的な思想の影響を読み取った。

第 4 章、第 5 章では、棺の組み立てに銚や釘などの緊結金具を用いた木棺を取り上げ、金具に残る木目痕跡などを手がかりにして木棺構造を復元するとともに、そうした金具が先行して存在する朝鮮半島からの影響を推定した。とくに岡林氏が「釘付式木棺」と命名した棺については、初期横穴式石室との関係を重視して、直接には百濟地域からの波及を指摘した。

第6章、第7章では、棺の外郭施設としての「槨」の形成過程という視点から、弥生時代の木槨から古墳時代の竪穴式石室への変化を、構造や形態の推移に力点を置きながら説得的に論述した。すなわち、岡山県楯築墳丘墓を典型例とする弥生後期後半の木槨を基盤として、槨の大型化、部材の石材化指向などの結果、古墳時代初頭に奈良県ホケノ山古墳に見られるような大型の「石囲い木槨」が誕生し、これを祖形として竪穴式石室が成立・発展したと見る理解である。

第8章では、古墳時代の棺槨成立の背景を視野に入れつつ、中国漢代から南北朝期を中心に、東アジアにおける棺槨の形成、変遷過程、墓葬に表れた死生観などを整理した。

以上の分析、検討を総括した終章においては、木槨の出現から竪穴式石室、粘土槨、横穴式石室へと至る古墳時代棺槨の成立と展開を体系的に提示した。そして、古墳前期における棺槨成立には、深い竪穴墓坑と堅牢な木槨によって遺体を強固に保護するという中国的な思想の影響が認められることを指摘し、「中国的な葬送イデオロギーの古墳的な表現」と述べて、東アジアにおける日本の棺槨の成立と意義について評価した。

【論文審査の結果の要旨】

社会の莫大なエネルギーを投入して築造された古墳は、当時の階層関係、地域関係、政治関係など多くの情報を有しており、日本の原始古代研究においてはつねに主要な対象となってきた。しかし、その古墳の遺骸を収容した「棺」やそれを覆う「槨」の研究は、遺存例の少なさもあって銅鏡や武器武具などの副葬品研究に比べて相対的に立ち後れていた。こうした状況の中で、古墳時代の多様な木槨を網羅的に分析対象とし、槨を含めた構造・系譜・展開を明確にした本論文は、棺槨にかんする初の体系的な専論というべき成果であり、その独創性がまず特筆される。

酸性土壌で有機物が滅失しやすく、実物の棺槨資料がきわめて限られるという条件の中で、自身の発掘調査での精密な土層観察や、他者の調査報告書の精緻な読み込みと合理的な解釈によって、腐朽した棺槨の構造を見事に復元していった作業からは、岡林氏の高いレベルの考古学的分析力がうかがえる。

本論文は、そうして明らかにした弥生後期の木槨から古墳前期の竪穴式石室への推移、長大な木槨の構造や機能、銚や釘などの緊結金具を用いた木槨の実態等を、時系列に沿った展開過程に整理して提示しており、体系的にも十分である。

さらに、東アジアの棺槨の状況に目配りすることによって、古墳時代棺槨の成立における外来的影響を見いだした点も、本論文の視野の広さを示すものとして評価できる。

ただ、労作に値する本論文にもなお改善を要する部分が見受けられる。たとえば、棺槨の実態を的確に捉えている割には、その差異や変化の背景にかんする考察が不十分な点や、棺槨の構造を機能面から説明することに重点を置いて、形態が持つシンボリックな側面が軽視されがちになっている点などは、その一例である。また、棺槨の成立に中国的な思想の影響が認められるとする場合、受容する倭人の側がいかなる観念を「中国的」と認識したのかなど、最新の中国側の研究状況も踏まえた、いまして周到な検討が望まれるところである。

とはいえ、全形のわかる遺存資料がきわめて少ない古墳時代の棺槨の構造について、発掘調査情報の精緻な検討に基づいて復元し、その成立と展開を初めて体系的に提示した本論文は、古墳時代研究に新たな地平を切り開く大きな意義を有している。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。